ふかまちのまど
第六十三号　九九年七月一日
発行元　深町　町内会連合会
連絡所　☎六三―三八七七

教育現場で思うこと（三十三）

成末　肇士

前回、父性について書きました。特に、日本は父性が一番欠けていると。私の筆不足だったのでしょう、二人の方から疑問点を投げられました。「母子家庭ではどうするのか」、「母性は必要ないのか」、「日本に父性社会は存在したのか」等です。

母性父性は母親（女性）、（父親（男性）とイクオールではありません。母性、父性は家庭や小社会における役割をさすものです。性差ではありません。母親でも父性的な人もいるし、父親でも母性的な男性もいます。

男女とも父性的なもの、母性的なものを合わせて持っていると思います。たゞ、母親が母性をより強く持ち、父親がより父性を備えている人が一般的だと思われています。

人間は、母親の体内で育ち、母親から生まれます。乳児期には母親の胸で慈しみ育てられます。母子一体感を持つのが自然です。父親は乳児にとっては、母親以外の人間の存在を意識させる最初の人です。つまり、社会を教える最初の人です。母子家庭は、母親が父性的な役割をしてもよいし、祖父、祖母でもその役割をすればよいのです。

子供が成長し、一人前になるということはまず、母親から離れて自立すること、精神的に自立し「甘え」をなくすることです。母親からの自立を助けるのは父親の役目です。

次に、子供は父親を超えようとします。自分で自立することです。この自立は精神的なもので、自分以外の他人の存在を認め、尊敬の念をもって付き合える存在になることです。子供の成長にとって、当然に母親は必要不可欠のものです。

昨今、母性すら失った母親の子殺しがニュースになっています。きっと、父性母性の区別がつかず、悩んでいたのでしょう。

幼児のしつけを例に考えてみます。母性だけのしつけは、個々の行為について「よい」、「悪い」を注意するだけです。「他人に迷惑をかけない」「他人を傷つけない」これは基準になり、子供も理解できます。しかし、授業中にあくびをしたり、遅刻をしても他人に迷惑をかけていない。だから、悪くないと考えるのです。

これに対し、父性によるしつけは、原理原則を教えることです。世の中には、「して良い」ことと、「して悪い」ことの違いがあること、「けじめ」をきちんとつけること、「美しい」とか「他人に不快感を与えない」ことが必要なことを教えるのです。

大人が電車の中でマンガに熱中してみたり、あくびをしたりすることは、恥ずかしいことが理解できるのです。このように「躾」には父性的なものも必要だと思います。しつけは母性、父性の両面が必要だと思います。

日本は大昔から母性国家です。自然との「協生」を大切にし、「和」を尊いものと考えてきました。これに対し、自然を征服し打ち勝つ対象と考えたり、キリスト教を中心にすえた西欧は父性国家です。地球規模の交流が不可欠で、西欧の公理主義、物質優先主義を採り入れた日本が父性原理を無視できない今日です。父性原理を考えた子育てが必要と考えるのです。日本独自の父性原理が必要なのかもしれません。

長い間まとまりのない考えを書いてきましたが、ひとまず今回で休ませて頂きます。

悪いのは子供ではありません。政治家、役人、親、教師、全ての大人の責任です。大人の価値感や意識を変えることが一番大切なことです。また、「三つ心、六つ躾、九つ言葉、十二文、十五理で末きまる」。（江戸商人の格言）

日本にも素晴らしい子育て論があったことを、もう一度考えてもらいたいと思います。（終）

▲▲

修学旅行の思い出（1）

思い出の形

教諭　掛　志穂

「おはよう。」

青空にひびきわたるぐらい元気のいい声。生き生きとした表情。学校で見る顔とは、一味違う。

五月十三、十四日、深小六年十三名と職員三名で、修学旅行に行ってきた。行き先は、大阪奈良、京都。天気にも恵まれ、かさを開いたり閉じたりすることは一度もなかった。むしろ、日がさがほしいくらいだった。

私が小学校の時の修学旅行は四国だった。歴史にゆかりのある場所を訪れたはずなのだが、覚えているのは、満濃池のほとりで休けいした時に食べたイチゴあめの味と、その時の景色（どこかのチームがヨットの練習をしていた）それから、金比羅さんにあがる階段の数を数えたこと、バスガイドさんに教えてもらった金比羅さんの歌（これは今でも歌える）ぐらいだ。

さて、今年の六年生の修学旅行。大阪では西日本一の海遊館を見学し、奈良では、世界最古の木造建築の法隆寺、大仏さん、京都では、清水寺、二条城、金閣寺、映画村を訪れた。学習になるものや、楽しく過ごせるものばかりであったが、果たして子どもたちが大人になった時、どんなことを覚えているのだろうか。

たとえ名所は覚えていなくても、家族とはなれ友だちと過ごした楽しいひとときは、思い出として残ってほしい。

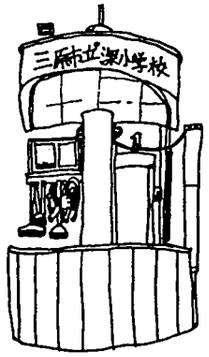
▲▲

児童の旅行記は、八月号より順次掲載します。

春夏秋冬

梶谷　マサヨ

島なみの　白線つづく　四国まで
島また島を　手をつなぐ如
島なみは　技術の粋を　極めつゝ
偉大なる橋　美しき橋
憧れの　しまなみ海峡　五月晴れ
波穏やかに　景色最高



六年　濱田　麻美

一九九四年四月、如水館高校が深町に移転し五年の歳月が流れました。その間、九七年には中学校が併設され、在校生は現在高・中あわせて一・五〇八人です。（尚、深町の人口は、五月末現在一・〇〇六人です）

如水館中学校在籍者数（5月1日）

学年	男子	女子	計
1年	35	24	59
2年	29	33	62
3年	37	19	56
計	101	76	177

七月町内各種団体行事予定

◆小学校（幼）
▼救急講習会・地区懇　一三日
▼参観日・地区懇・救急講習会（幼）　一三日
▼体重測定（低）　一六日
▼同（高）・集金日　一七日
▼お楽しみ会・集金日（幼）　一七日
▼体重測定（幼）　一八日
▼貯金日　一九日
▼弁当終了（幼）　一九日
▼個人懇談（小・幼）　一九日
▼同（小・幼）給食終（小）　二〇日
▼夕涼み会（幼）　二七日
▼終業式（小・幼）　二九日

◆女性会
▼JA女性部運動会（久井町）　四日
▼親睦会　上組　八日
中組　一三日
下組　二一日

◆消防団
▼特別教育（ポンプ操法）　九日

◆子ども会
▼防犯少年少女球技大会　四日
▼三菱ユーワ会球技大会　一八日
▼海水浴（サギ島）　二〇日
（例年の「キャンプ」行事は、今年は中止致します）

◆第二中学校
▼地区懇談会　二二日
（町民会館二階）

公衆電話休止のお知らせ

町民会館に設置しておりました公衆電話が、不忙により六月より休止になりましたのでお知らせします。　町民会館長

展望席

「しまった。三原の町工場に勤めるより、都市銀行に勤めればよかった」と、後悔？している。

銀行員として、行内をうまく泳ぎまわり、MOF担で昇進の道を掴みトップへ。

▼こんな不謹慎ことをしたためるのは、《銀行役員超高額退職金　三和の渡辺会長六億円・佐伯頭取三億円　氷山の一角》週刊朝日七月二日号　広告をみての感想。（その後減額の記事）他人の懐を探る趣味の持合せはないが、大手都市銀行など十五行に、七兆四千五百億の公的資金の注入が仮決定された（三月十二日　日経）こと、無関係ではない。▼同じバブル崩壊のアメリカでは、銀行経営者三千七百人に有罪、二千五百人に実刑判決。この違いを国情の差で片付けてよいものか。日本では、バブルを発生させた責任と、長期に渡っての無策責任はどこにあるのだろうか。国家と、民間業界機関の責任が曖昧。▼町の個人経営商店・中小企業経営者は、家・屋敷を担保に入れて、資金調達している方もあるだろう。一回の不渡りで経営の命脈を断たれる。自分がお金を借りるのも、借りる人の保証をするにも、一定の制約があり簡単ではない。これは、当然ながら確実な「債権回収」を前提とした『貸方』の自衛措置。さて、今回の不良債権発生と回収の最終責任は一般国民なのか。

99-00017

98（平成10）年度町内会連合会収支決算書

収入の部

科目	金額	内訳
前年度繰越金	284,344	
一般会費	688,200	200円/1戸月
盆行事特別会費	172,200	600円/1戸×287戸
市助成金	492,000	市民大会＝200,000 敬老会＝292,000
諸収入	88,500	敬老会祝金等
預金利子	247	
合計	1,725,491	

支出の部

科目	金額	内訳	
活動費（体育部）	467,113	町民運動会	84,215
		市民体育大会	318,021
		ゲートボール大会	35,397
		ターゲットゴルフ大会	3,980
		ビーチバレーボール大会	25,500
助成金	230,000	子ども会	150,000
		尚寿会	50,000
		郷土誌	30,000
盆行事	87,570	くじ賞（99年度分として保管）	82,320
		お香セット	5,250
敬老会	350,812	弁当 136,185　紅白饅頭	51,975
		菓子 2,946　飲みもの	28,580
		記念品 112,455　通信 他	18,671
事務費	48,040	印刷代	
会議費	10,160		
諸費	104,600	祝金＝如水館野球部・駅伝部	60,000
		同＝第二中学校ソフト部	30,000
		防犯組合費	14,600
次年度繰越金	427,196	98年度盆行事費を99年度に繰越	
合計	1,725,491		

会計監査報告

1998（平成10）年度会計決算について、関係証票により審査の結果、いずれも正確適正に処理されてることを認めます。

1999（平成11）年4月10日　監査委員　藤川　敏和

監査委員　石井　良子　印

深の歴史余話（十四）

高崎　壽郎

堂さん巡り(6)
＝堂の利用と沖田阿弥陀堂＝

全県的に辻堂、四つ堂と称するものは、信仰、地域住民や旅人の憩い、レクレエーションの場として利用された。

まず、家族の無病息災、家業の繁栄、祖霊の供養、施餓鬼法要など、信仰の場として堂をくらしと信仰の中心においた。

また堂は、名もない旅人や地域住民の休息、雨やどり、わらじのはきかえなど心身の休まる場所でもあった。夏には、蝉しぐれを夢路にききながら、昼寝をする旅人や村人がいた。堂は自由で気楽な所だった。

お盆には、堂の広場で踊りの輪がつくられ、終夜にぎわった。戦時中は、堂で常会が開かれ、配給物資の分配も行なわれた。農村では、農作物のできばえがよく話し合われた。

阿弥陀堂は中組沖田にあり、木造寄せ棟造りカワラ葺。本尊は阿弥陀如来で、高さ28糎の木彫金色立派な仏像がある。他に石仏四体（船形坐像）もある。

近年、破損がひどくなり、昭和六一年（一九八六）に改築されたが、堂の板に次のような縁起覚え書が記されている。

合掌　沖田阿弥陀堂縁起覚書

当沖田阿弥陀堂の建立の年号は明確ではありません。言い伝え、老人の証言記録板に依ると次のことが言えるのです。

当地域に於て、浄土真宗が広く信仰し始められた初期、即ち各戸に未だ仏像が無い頃、大通寺、善教寺、専福寺、浄泉寺の四ケ寺の勧奨に依り、上組中組共有の堂宇が中垣内に建立され、地区内の住民は阿弥陀如来の広慈悲におすがりして、色々な苦痛から開放されて安心立命を請い願ったのであります。

明治四拾四年六月、火災によって焼失し、県道の開通に伴って明治四拾五年壱月、現在地に再建されました。

爾来、七拾五年の歳月を経て破損もひどくなり、関係地区住民の善意協賛を得て、修理並びに屋根葺替を行ないました。

昭和六拾壱年五月吉日

世話人一同識

沖田阿弥陀堂　阿弥陀如来像

絵　船本　輝明

阿弥陀堂は芸藩通志にも載っており、深でも古い方の堂と言える。

人々は、朝なタなに阿弥陀堂の方角に向かって拝礼し、野良仕事で近くを通る時も同様敬虔な祈りを捧げたことと思われる。

この堂は、県道拡張により再度移転を余儀なくされる所となった。▲▲

※移転先は、田屋講の「屋敷小夜子様宅南隣」（旧場所）が予定されています。

●メダカの学校を救おう

いろいろな要因があるのだろうが、深の小溝で普通に見られたメダカが、最近めっきり小なくなった。メダカの学校崩壊の危機である。

五月上旬、上射場養魚場から黒メダカ三千匹の寄贈を受けた深小学校では、その半分を五年生の理科教材用として観察池（岡本義弘氏提供）に入れ、残は深の大川へ放流した。

自然に優しい環境づくりと、メダカの大いなる蘇生（そせい）を願って。

六月、梅雨の合間の夕方、増水した藤井川の上流（辰巳講入り口）で、中之町の児童十人ばかりが魚釣りを楽しみました。

最近、釣竿片手に深町の自然を楽しむ子どもが目につきます。魚の住めるきれいな環境を守りたいものです。

●わんぱく相撲準優勝

五月三十日（日）、三原市さつき祭りで、恒例の第十五回わんぱく相撲全国大会の予選が行われた。

深小学校五年、河原勇真（ゆうま）君は、よく健闘したが惜しくも学年第二位に終わった。